

伊奈佐保曾江乃水乎都久志

渡
部
和
雄

—

東歌の譬喩歌の項、遠江国歌に、

三四二九 等保都安布美伊奈佐保曾江乃水乎都久思安礼乎多能米豆安佐麻之物能乎
という歌がある。

末句「アサマシモノヲ」がはっきりしない。

『校注万葉集東歌・防人歌』（水島義治）

「浅す」（四段）の未然形に「まし」（推量）および接続助詞「ものを」のついたものと考えるべきか。

『万葉集全注 卷第十四』（同氏）では、
どうせ心浅くお疎みなさるでしょうよ。

と解釈され、「浅くなるに対して浅くする、浅い状態にする意の他動詞である。」と説明される。

『注釈』（沢潟久孝）

やがては心浅くなさるでせうものを。

『日本古典集成 万葉集』

「あさ」は、下二段自動詞の「あす」に対する、浅くするの意の四段他動詞の未然形か。

右様の「浅す」（四段・他動詞など）については、古事記の息長帯比賣命の条に、

麻都理許斯美岐叙。阿佐受衰勢。佐々。

とあるのを、

『古事記』（西宮一民）に、

アサズとは「浅くならず」であるが、盃の底に酒が浅く残るような飲み方をせずに飲みほせ。しからばまた酒を注ごうという意味の勧酒の表現である。史記、魏其武安侯列伝、元光四年に「不能満觴」（杯を干すことはかなわぬ）とあるのが参考になる。

という。（平成五年二月二十日新訂七刷）

（杯を干すことはかなわぬ）を〈浅くする〉ことはかなわぬと解すれば、「浅す」は他動詞四段ということになるのかも知れない。

しかし西宮氏の『古事記』では、右にも「浅くならず」とあったように、「アスは自動詞である。」と初版（昭和四十八年九月）以来変らないようである。『古代歌謡全注釈』（土橋寛）

盃の中に酒が残らないように、すっかり飲みほしたまえ。

を「よいと思う」とされるわけだから、「あす」は〈浅くなる〉〈残る〉なのであろう。
傍訓も初版以来、

(残 飲)

阿佐受袁勢

と変っていない。頭注も、

「浅くならず」とは盃の酒の飲み方が底に浅く残ることをしないことをいう。
とあったから、一貫して変りがない。

ただ(残 飲)は〈残さず飲め〉なのか、〈残らず飲め〉なのか。そしてまた、(坏を干すことはかなわぬ)は〈坏を残すことはかなわぬ〉とよんでもいいのだろうか。

干という字は、

三八五二 海者潮干而(ひて)

三八八六 日乃異尔干(ほし)

とよまれているが、

四〇四三 之保能波夜非波(ひば)という音仮名がある。

「ひ」「ほし」は水(分)がなくなることというのだろうか。としたら、(坏を干すことはかなわぬ)は、水分(酒)がなくなつて、坏をほしているの(状態)は不可というのであろうか。

『記紀歌謡全註解』に、

乾さず食せーつづけて飲みほせの意。「あす」という動詞には、下二段活用のみでなく、四段活用もある。ここは

四段活用とみられ、他動詞に用いてある。酒杯を乾かさずとは、酒を続けて飲むことを意味する。という。そうであつたら、

〈アサマシモノヲ〉は〈アセマシモノヲ〉の他動表現となるのかも知れない。

二

『日本古典文学全集 万葉集』では、

下二段の頼ムは信頼させる意。……中止格で次句へは続かない。

あさましものをーアスは放置する意か。『古事記』中の「あさず飲せ」も、盃を下に置いて休むことなく飲みたまえ、の意であろう。『名義抄』に「眞、アス、オク」とあり、『万象名義』にも「眞、置也、廢也」とある。

なお、仮定条件句を伴わないマシモノヲの上接動詞は、原則的に自分の動作・作用に限られる点に疑問がある。

とし、口訳を、

捨てて置いてくれたらよかったのに

とする。〈捨てて置く〉のは相手である。

〈アス・オク〉なら、「アサズラセ」は〈置かず飲め〉となって丁度いいかも知れない。

ただ「オク（置く）」なら東歌・防人歌には用例が多い。

三四三七 陸奥の安達太良真弓波自伎於伎_レせらしめきなば弦はかめかも

の「ハジキオキテ」は「アス、オク」（置也、廢也）によく似ていると思われる。

三四九〇 梓弓末は寄り寝む現在こそ人目を多み汝を波思尔於家礼

三五二七 沖に棲も小鴨のまゝころ八尺鳥息づく妹を於伎弓伎努可母

三五五一 味鴨の渇に咲く波平瀬にも紐解くものかなしけを於吉弓

三五五六 潮船の於可礼波かなしき寝へれば人言しげし汝をどこも思武

三五六七 於伎弓伊可婆妹はま愛し 持ちて行く梓の弓の弓束にもがも

三五七一 己妻を人の里に於吉おほほしく見つつそ来ぬるこの道の間

三五七三 あしひきの山葛かげましばにも得がたきかげを於吉夜枯らさむ

とみられるように、「置く」は「ヲ置く」である。

《他者ヲ》置く形に対して、自己に対しても「置、廃」を「アス」と言ったのだろうか。そこでは、《廃、余》される性質となる。

あなた(男)が私(女)ヲ放って置く、という形になる。

前掲の「思保夫祢能 於可礼婆可奈之」について『全注』では、「潮船の置かれれば悲し」と訓んで、潮船を枕詞。「置かれ」は「置けれ」の訛としている。

ここでは《女が置かれる》の受身ではなく、「置く」は男が女を放って置くの形にしている。

二つ並べてみると、

「アサーマシモノヲ」

「オカーマシモノヲ」

の前半を同趣として、後半「マシモノヲ」の反実仮想・推量・願望がうまく続かないように思われる。

ここも自動的表現と他動的表現の問題なのであろうか。

三

また、右に掲げたように、『全集』では、「マシモノヲ」を一まとまりのように受けとつて、その上接動詞は、〈自分の動作・作用〉を原則とするといっている。

「モノヲ」「マシモノヲ」はほとんど慣用語句のように多用されていて、仮定条件句を伴わないと、希望、願望、選択風になっている。もつともこの性質は仮定条件句を持つ時からそうであつた。

八六 かくばかり恋ひつつあらずは高山の磐根し枕きて死なましものを

一〇八 吾を待つと君が濡れけむあしひきの山のしづくに成らましものを
のような場合、「ましものを」は作者の願望、意志、選択のようにある。

このような前提からは、「浅さまし（ものを）」は作者の動作・作用（願望・意志）のようにあるはずである。四句までは中止法ということになる。

『集成』に、

すっかり私を安心させておきやがつて……、いっそ干しあげてやればよかったものを。

と自分（作者）の意志の強烈さになっている。

引佐細江を？ みをつくしを？

『角川文庫 万葉集』（伊藤博）は、

いつそつれなくしてやればよかった。

というように、第五句は、四句までの属性ではなくなっている。「みをつくし」が主語にはならない。

しかし仮定条件句なしにも、〈反実仮想〉部分が似ることがある。

周防国の玖河郡の麻里布の浦を行きし時に作れる歌八首（の中）

三六三〇 真楫貫き船し行かずは見れど飽かぬ麻里布の浦にやどりせましを

三六三一 大船にかし振り立てて浜清き麻里布の浦に宿りかせまし

三六三五 妹が家道近くあれせば見れど飽かぬ麻里布の浦を見せましものを

などの終句、反実仮想による願望の気持は似ている。その願望が作者（自己）のものであるという原則は先にみた通りである。

九一 妹が家も継ぎて見ましを大和なる大島の嶺に家もあらましを
で、「ましを」は願望風である。

一六三 神風の伊勢の国にもあらましをなにか来けむ君もあらなくに
では選択風に使われている。

一七一 高照らす我が日の御子の万代に国知らさまし島の宮はも

は、一首の表現上には仮定条件句がなくて、日の御子を主語とした、作者の推量風になっている。

一七三 高照らす我が目の御子のいましてば島の御門は荒れざらましを
は仮定条件句を持つが、「まし」の気持は似ているのではないか。

天皇崩之時 太后御作歌一首

一五九 ……今日もかも問ひたまはまし

明日もかも見したまはまし

について、『全集』では、「ここはもし生きていたらという仮定にもとづく仮想的内容を述べる。」という。というのは仮定条件句がないことである。「まし」が仮想的な内容、推量性を持ちつつあったということである。

（今日にでも訪れられようものを

明日にでも御覧になろうものを

と口訳されると、これは直前の

夕されば見したまふらし

明け来れば問ひたまふらし

の「らし」に近くなって、願望、意志、選択などの影が薄くなって、推量的一般性に近づいている。

逆に、当然

一五一 かからむの懐知りせば大御船泊てし泊りに標結はましを

二一一 わが屋前に咲ける秋萩常にあらばわが待つ人に見せましものを

三六一六 沖の風いたく吹きせば吾妹子が嘆きの霧に飽かましものを

というように、願望や意志を持たせることができる。

「まし」「ましを」「ましものを」は仮定条件句の有無以前に、願望や意志の性質と、反実仮想による推量性があるのではないか。

また仮定条件句があっても、〈自分〉（我）を含ませると、一般性に、「まし」が一般化されることもあるだろう。

六〇三 思ふにし死にするものにあらませば千遍そわれは死に返らまし

「吾は」は願望の主体でも、意志の主体でもない。人々の一人の状態である。

二三九〇 恋するに死にするものにあらませばわが身は千遍死にかへらまし
でも、単に、「まし」は〈ダロウ〉ほどの推量的・一般性だろう。

三七八九 あしひきの山縵の児今日往くとわれに告げせば還り来なまし
は、〈帰つて来たであらうに〉くらいである。

四

さて東歌の様相は、

三五四五 明の香川堰くと知りせばあまた夜も率ねて来ましを堰くと知りせば
は、仮定条件——願望・選択風。

三五六八 後れ居て恋ひば苦しも朝狩の君が弓にもならましものを

では、仮定条件は上三句で終っているともみられる。下三句は願望・選択風。

三三五四 寸戸人のまだら衾に綿さはだ入りなましもの妹が小床に

は仮定条件句のない願望風。

三三八六 愛し妹を弓束並べ巻き如己男の事とし言はば伊夜可多麻斯尔

【全註】「まし」は反実仮想の意の助動詞。

「勝た」＋「まし」と解したが「堅増し」「片増し」とも解し得よう。

とあるのを参考にすれば、この「カタマシニ」は、一樣に並べられないかも知れない。

ただ「事とし言はば」という仮定条件は〈願望〉〈選択〉〈妄想〉〈推量〉などをとりうるだろう。

一応これは除くとして、他の「マシヲ」「マシモノヲ」「マシモノ」は当人の願望・選択風になっている。

としたら、三四二九の「アサマシモノヲ」も「引佐細江のみをつくし」（という主語）の性質ではなくなつてこよう。

『全集』のように、（わたくしを）『捨て置いてくれたらよかったのに』という少々負の願望か、『集成』のように、「いっそ干しあげてやればよかったものを。」という願望になるだろう。

第四句で切れる代表歌に、

三四四四 伎波都久の岡のくくみら我摘めど籠にも満たなふ背なと摘まさね

がある。「我摘めど籠にも満たなふ」と「背なと摘まさね」だから一元的な表現ではない。ただ意味というか、筋は成立している。譬喩歌もそれ自体の意味を持つのではないか。

五

「タノメ（テ）」という表現はほとんど逆接的な条件句である。「タノメ」は社会的一般生活の中に、孤独が掘る穴である。深くなればなるほど矛盾の構造を示す。

六二〇 初めより長くいひつたのめずは（不令恃者）かかる思ひに会はましものか

『全集』では、「頼りにさせるようなことを言わなかったら」と「タノメズハ」を仮定条件のように口訳している。

この「たのめずは——会はしものか」は八六の「恋ひつつあらずは——死なましものを」の形式に似ている。けれども終句は、

八六一願望・選択的にあるに對し、

六二〇—推量・偶然的である。

また、

八六四 後れ居て長恋せずはみ園生の梅の花にもならましものを

は、『全集』に「長い恋をするくらいなら……梅の花にでもなったほうがましです。」と口訳されていて、（するくらいなら（ば））という仮定条件—願望・選択は八六のそれに似ている。

七四〇 言のみを後も会はむとねもころにわれをたのめて（吾乎令馮而）会はざらむかも
も「たのめて」いる限り会わないわけである。「たのめて」会うのは政治的な風景であり、政治に似た生活の風景である。

三〇三一 天雲のたゆたひやすき心あらばわれをな頼め（吾乎莫馮）待たば苦しも

では「タノメ」の構造が客観的にも把握されている。こうしてみると、

三四二九 遠江引佐細江のみをつくし我れをたのめてあさましものを

の「タノメテ」は否定的、矛盾的なものを含んで下句をとろうとしているのではないか。

この「タノメ（テ）」と四段の「タノム」は表裏だから、「たのむ」という表現も、いつも逆接を予想しているだろう。

大伴坂上郎女怨恨歌一首 并短歌

六一九 ……大船のたのめる時に

（ちはやぶる神や離くらむ

うつけみの人が禁ふらむ

と接続し、その短歌が先の六二〇なのである。

四二三 大船の思ひたのみて通ひけむ君をば明日ゆ外にかも見む

右の一首、或いは柿本朝臣人麻呂が作といふ

七年 乙亥 大伴坂上郎女尼理願の死去を悲嘆しびて作る歌

四六〇 ……頼めりし人のことごと草枕旅なるほどに……

九〇四 大船の思ひ頼むに思はぬに横しま風の……

こうした発想は柿本人麿の表現で一般化したらしい。

一六七 大船の思ひ馮みて天つ水仰ぎて待つにいかさまに思ほしめすか……

といった風に儀礼様式を形成し、挽歌の定形のようになる。

卷十三では幅があった。

三三二 大船の思ひ頼める君故に尽くす心は惜しけくもなし

は（タノム）を疑っていないようである。

三三八 ……大船の思ひ頼めどうつつには君には逢はず夢にだに逢ふと見えこそ天の足り夜に

は、（タノム）を期待しようとしている。

三三八 大船の思ひ頼みてさな葛いや遠長く我思へる君によりては言の故もなくありこそと……

と〈タノム〉をつなごうとしている。

三三〇二 ……大船の思ひ頼みて出立の清き渚に……
も同様である。

それが挽歌に於ては、

三三二四 畏けど思ひたのみて

三三四四 大船の思ひたのみて

と逆接定形化して行くのである。卷十三には「柿本朝臣人麻呂が集」の歌がある。

六

「安礼をたのめて」の〈吾〉は男か女かと分けてみると、それは女側を示すだろう。信頼されるのは社会組織側（男）である。そして「吾をたのめてーアサマシモノヲ」は逆の対応関係としてあるだろう。

一七七〇 三諸の神の帯ばせる泊瀬川水脈し絶えずは我忘れめや

『全集』ミヲは川や浅海で他より特に深くなつて水が流れている筋。

みをつくしーミヲの所在がわかるように杭を並べ立てて、往来の舟の目当とする航路標識。（三一六二）

としてみると、「引佐細江のみをつくし吾をたのめて」は〈深い〉を基準にして言い、「アサマシモノヲ」は〈浅い〉を基準にして言っていることになる。たとえば、

一三八一 広瀬川袖漬くばかり浅きをや心深めて我が思へるらむ

といっているのとはほとんど同じ構造である。

三三〇一 …… 深海松の深めし我を……

三三〇二 …… 深海松の深めし児らを……

ともあるように、「心深めて」という表現が、いつも相手の〈浅さ〉に対応する。

三八〇四 かくのみにありけるものを猪名川の奥を深めてわが思へりける

というのも〈心深めて思っていた〉に對して、ただこれだけの〈浅さ〉（こういう現実でしかなかったのに）であったことをいう。

「かくのみにありけるものを」は、

二九六四 かくのみにありけるきみを衣にあらば下にも着むと我が思へりける

四七〇 かくのみにありけるものを妹も我も千年のごとく頼みたりける

四五五 かくのみにありけるものを萩の花咲きてありやと問ひし君はも

などとして使用されていて、〈心深めて思っていたこと〉について、所詮は現実の〈浅さ〉を示す表現であった。

三八〇四、五には物語の背景があつて、

三八〇四 かくのみにありけるものを猪名川の奥を深めて我が思へりける

三八〇五 ぬばたまの黒髪濡れて沫雪の降るにや来ますここだ恋ふれば

今案ふるに、この歌は、その夫使われて、既に累載を経ぬ。而して還る時に当たりて、雪降る冬なり。斯に因りて、娘子この沫雪の句を作るか。

この左註にみるように、問答がうまく適合していない。四七〇では相手がなくなっているから、三八〇四の相手も

なくなっているのだろう。物語を背景とする歌は必ずしも現実的ではなく、とすれば右様の歌も集団性、一般性の歌である。四五五の歌も同様に相手がなくなっている。

こうして、「かくのみにありけるものを」と表現することは「心深めて」に対するものとしてある。水深の標識が「吾をたのめて」いる基準であつたら、その水深が〈はかなさ〉に転化しているものと相関しているだろう。

七

四四九一 大きな海の水底深く思ひつつ裳引き平しし菅原の里
にも物語がついている。

右の一首、藤原宿奈麻呂朝臣の妻石川郎女、愛を薄くし離別せられ、悲しび恨みて作る歌なり。年月未詳。

ここでは〈水深〉と〈深い思い〉が一致し、それは〈薄愛離別〉と逆対している。

三八〇七 安積山影さへ見ゆる山の井の浅き心を我が思はなくに

にも物語がある。ここでは「山の井の浅き」と「浅き心」が一致し、「我が思はなくに」に對置されている。

物語は深水に深い心、浅水に浅い心を托している。というのはそうした一般性が人々に納得されていたということでもある。

〈満ち来る潮のいや増しに〉〈いや増しに思へか〉といった類似表現は多くみられる。みをつくしはその水深を保証するものである。

一三八六 大船に真楫繁貫き漕ぎ出なば沖は深けむ潮は干ぬとも（潮者干去友）

は、男女の心が薄情になっても、〈大船の思ひ頼みて〉沖に漕ぎ出せば、将来は心が深くなってくれるだろう、という一般的歌い方なのであろう。「潮は干ぬとも」を対応的に使っている。

遠江引佐細江のみつくし我れを頼めてあさましものを

「遠江引佐細江」だから「みつくし」は船の航路標識である。それが安全水位を示している。故に「我をたのめて」である。それに対して「アサマシモノヲ」は逆接的に対応しているのではないか。

水面、みつくしの水位はいつもと同様に安全水深を示しているが、見えない底が〈あせていたった〉のではない。表面的には同じ目盛に水位はあっても、水脈の底が流れ込んだ土砂などによって浅くなっていることはあるのではないか。瀬が浅くなって、細江の幅が広がればみつくしの水位に余り変化がないこともある。

九六九 しましくも行きて見てしか神なびの測はあせにて瀬にかなるらむ

「測者浅而」を『全訳注万葉集』では「浅さびて」と訓む。「浅」の字からはとにかく浅くなってであろう。測は淀んだ深い所で、瀬は流れの速い、測に対しては浅い所である。

二九二 ひさかたの天の探女が石舟の泊てし高津はあせにけるかも（浅尔家留香蓑）

二〇一八 天の川去年の渡りで移ろへば川瀬を踏むに夜ぞ更けにける

「渡代」は次の歌では「渡り瀬」。

二〇六七 天の川渡り瀬深み舟浮けて漕ぎ来る君が楫の音聞こゆ

前の歌では水の浅い所を徒渉してくる。足で渡る所を踏み試みるわけである。後の歌ではそこが深くなってしまっていて徒渉できないので舟でやってくることに。

二〇八四 天の川去年の渡り瀬荒れにけり君が来まさむ道の知らなく

「渡り瀬」には徒渉のものと航行のものがある。そこは深くなったり、浅くなったり一様ではない。

流れ込む川口にある引佐細江のような所では〈水脈〉、(右の歌では渡り瀬)が変化し易かったであろう。先に立ててある標識では必ずしも信頼するという訳には行かない場合があったろう。水脈が変っている場合もある。

「みをつくし我を頼めて」はむしろそうした前提による表現ではなかったか。

それは底が浅くなっていることで〈干す〉ことではない。干すなら地面が見えている。「干」の字と「浅す」(下二浅くなる)は内容を異にしているようである。

二二九 塩干なありそね ヒ

二九三 潮干の シホカレ

三八八 塩乎令干 シホヲカレシム

四三五 干卷 カレマク

五二一 苧干 カリホシ

など「干」は水分がなくなる状態をいう。

五三三 難波潟潮干のなごり飽くまでに人の見む児を我しともしも

で、「ナゴリ」は干潟に残っている水だから、〈潮干〉は潮水が干た状態をいう。

四〇三四 奈呉の海に之保能波夜非波あさりしに出むと鶴は今そ鳴くなる

潮の干た所に鶴が降りるわけである。

こうしてみると、「アサシモノヲ」は〈いっそ干しあげてやればよかったものを〉とも、〈坏を干すことはかなわぬ〉とも、ニュアンスの違った表現ではないか。

『全注』に、

「浅す」は下二段が普通であるが、ことに「浅さ」であるから四段と考えざるを得ない。浅くなるに対して浅くする、浅い状態にする意の他動詞である。

という。やはり下二句は上三句の属性なのではないか。「落標」と表現してくるからには「浅す」を取る必然を持っているのではないか。

八

『私注』 浅くなりましようものを

『大系』 (本当は) 浅い心であつたのに

『全訳注』 心浅くするだろう

『注釈』 やがては心浅くなさるでしようものを

など、これらの訳は、「アス(下二)」+「マシモノヲ」に近い。即ち「浅せましものを」とあるのに帰一する。

『疏』 この発音も決して誤りではない。都風には「あせまし」といふところだ。

三三五 筑波嶺に雪かも降らるいなをかも愛しき子ろが布乾さるかも

は、普通、〈降れる〉↓〈降らる〉、〈乾せる〉↓〈乾さる〉という風に考えられている。

三四五六 うつせみの八十言のへは繁くとも争ひかねて我を言なすな

〈言のへ〉は〈言のは〉といわれている。

〈あせましものを〉は〈浅くなるだろうに〉、〈底が浅くなっているだろうに〉ほどの内容であろう。

三四五五 明日香川下濁れるを知らずして背なと二人さ寝て悔しも

と似た趣向であろう。水面、見た目には変っていない、底が濁っている。誠実な心がない。「引佐細江のみをつくし（水深標識が）吾を頼めて」水底が変化している。〈浅い〉と〈心浅い〉は物語的一般性であった。

この物語的一般性は第四句までで中止はしないだろう。下濁っているのは男であった。

女が吾（男）を信頼させておいて／

その男（吾）が女を干し上げる（いじめ）の形はとらないだろう。

前後してある、

三四二八 安達太良の嶺に伏す鹿猪のありつつも我は至らむ寝処な去りそね

で、『集成』に「上二句は序。「ありつつも」を起しつつ、結句と響き合う。」という。響き合うは一般的了解をいうのだろう。そのように

三四二九 遠江引佐細江のみをつくし我を頼めてあさましものを

も第三句までを「あさましものを」と関連させると、「みをつくし」は水深を示すから、「あさましものを」は逆に水底が浅くなっていることをいうだろう。

みせかけは深さを示して、その実、底は浅くなっていたのに、というのではないか。

二九七〇 桃花染めの浅らの衣浅らかに念ひて妹に逢はむものかも（男）

二九六六 紅の薄染衣浅らかに相見し人に恋ふる頃かも（女）

は関連して歌われたものか、共に表記は「浅尔」とある。

「浅茅」を使うことはよくある。

卷八、一四四九、一五一四、一五四〇、一五七八、一六五四

卷十 二二五八、二二八六、二二〇七、二三三一

〈心浅い〉の比喩はみられない。

『古今六帖』 利根川は底に濁りてうは澄みて有りけるものをさねて悔しく

『夫木抄』 利根川の下は濁りてうは澄みて有けるものをさ寝て悔しき

という型のものである。表面では信頼させて、底（下）が濁っているという対応。

三四一三 利根川の川瀬も知らず直渡り波にあふのす逢へる君かも

は深い所に踏み込んで大きな波に会ってしまったこと。

さて、三四二九の歌を、

遠江引佐細江のみをつくし我を頼めて浅せましものを

という風に訓む。「浅せましものを」は推量句と考察する。それは「みをつくし」からの〈我を頼めて〉を通る水脈にある。

引佐細江のみをつくしは（表面は）私を信頼させておいて、（底は）浅くなっていただろうに。（或は将来は浅くなるだろうに）。

という『譬喩歌』であろう。

九

あるいは形容詞「浅し」の語幹に〈増す〉がつくというようなことがあったろうか。

〈浅さ増すものを〉、次第に底が浅くなって行くだろうに。

三九八五 満ち来る潮のいや増しに

四一一六 行く水のいや増しにのみ

は副詞に一体化している例である。東歌 愛し妹を弓束並べ巻きもころ男のこととし言はばいや可多麻斯尔

『集成』 いや片増しに

『全集』 いや堅増しに

というのは副詞風に理解するのであろう。

東歌 悩ましき人妻かもよ漕ぐ舟の忘れはせなな伊夜母比麻須尔

は『集成』風には、

私を忘れたりしないでおくれ（人妻）

胸の思いがますますつのつてくるものを（作者）

の形で、終句が作者の感情になっている。

四四三一 衣に増せる

四四五〇 咲きは増すとも

といろんな例があるけれども、〈浅さ増す〉という例は勿論みられない。
ただ、

忘れはせなな

なでしこ散らめやも

いや思ひ増すに

咲きは増すとも

の対応が、

引佐細江のみをつくし我を頼めて

浅さ増すものを

に似ているようにも見える。

四三八六 わが門の五本柳何時も何時も母が恋ひすす奈理麻之都之母

『全註釈』『成り増し』『つ』助動詞「しも」助詞

という解釈もあった。普通は〈業ます〉。

遠江引佐細江のみをつくしは、私に信頼させておいて、次第に底が浅くなるだろうに。